

内田康著 『村上春樹論—神話と物語の構造』

大場, 健司
朝鮮大学校外国語学部日本語科 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/1957709>

出版情報 : 九大日文. 31, pp.44-46, 2018-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

◎書評

内田康著 『村上春樹論——神話と物語の構造』

大場 健司

すでに現代文学のキャンオン (canon) となった村上春樹(一九四九年)は、国内外を問わず研究が行われている作家の一人である。その中でも特に研究が活発化しているのが台湾である。

台湾の淡江大学では、二〇一四年九月に村上春樹研究センター(村上春樹研究中心)が設立されており、村上春樹国際学術研究会も北九州などでこれまでに六回行われている。今回の書評で紹介したいのは、その淡江大学日本語文学系、及び村上春樹研究センターで研究をされている内田康氏の著作『村上春樹論——神話と物語の構造』(瑞蘭國際、二〇一六年一月)である。

次に、本書の内容を簡単に論じていきたい。序章「村上春樹作品とテクストの深層」で行われているのは、本書で首尾一貫して用いられている方法論に関する宣言である。それは、村上のこれまでの作品を神話的な「物語」の「構造」(structure)へと還元するというものである。それは登場人物の「役割」(本質)に関しても同じであり、第三章「(他者)〈分身〉〈メデイウム〉——村上春樹、80年代から90年代へ——」では、登場人物の「役

割」が、理解不可能な(他者、主人公の(分身)、この世界と別の世界を媒介する非現実的な(メデイウム)の三種類に区分されることになる。更に、第六章「調和のとれた完璧な共同体」に潜む闇——『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』論——においては、『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』(文藝春秋、二〇一三年四月)の「構造」が、カール・グスタフ・ユング(Carl Gustav Jung, 1875-1961)のユング派心理学における「元型」から論じられている。このような特定の「元型」への構造主義的還元自体、何も真新しいものではないかもしれない。例えば、平野芳信『村上春樹と〈最初の夫の死ぬ物語〉』(翰林書房、二〇〇二年四月)では、村上春樹『ノルウェイの森』(講談社、一九八七年九月)や高橋留美子(一九五七年)のマンガ『めぞん一刻』(『ビッグコミックスピリッツ』一九八〇年創刊号—一九八七年一九号)などに『最初の夫の死ぬ物語』という「構造」への還元が行なわれているからだ。それでは、こういった従来の構造主義的研究との差異化はいかにして見いだされ得るであろうか。それは、本書において「人が既存の神話や歴史に対して如何に抗しうるのか」(二二頁)という「構造」への還元不可能性として示されているだろう。

第一章「直子」から、「直子」へ——村上春樹初期作品における〈喪失〉の構造化——で論じる対象となっているのは、村上のデビュー以来一〇年間の作品に登場する「直子」と「直子」的女性という「記号」(二五頁)である。ここでは、登場人物の「役割」(本質)が、〈伴走者〉、〈表層的喪失〉、〈深層的喪

失)に還元されながら、先行研究でもあまり扱われることなかった「街と、その不確かな壁」(『文学界』一九八〇年九月号)が論じられていることが重要である。それでは、喪失者としての「記号」へと還元されるべき、「直子」一人ひとりの単独性はどのように見いだされるのだろうか。それを見いだすには、反復する「構造」からのズレ(差異)が重要になってくるだろう。

そのような「構造」からのズレの問題が論じられているのが、第二章「回避される「通過儀礼」——『羊をめぐる冒険』論——」である。「羊をめぐる冒険」(講談社、一九八二年一〇月)はこれまで「通過儀礼」の「構造」を持つ「物語」として読まれてきた。本章で見いだされるのは、その「通過儀礼」からのズレである。興味深いのは、作中で「プルターク英雄伝」や「ギリシャ戯曲選」やその他の何冊かの小説」への言及があることから、エウリピデス(Euripides, BC480?BC406)の『メディア』(Medea, BC43)における「金の羊」毛探索伝説^(Gold-Fleece-Fable)、及びプルタルコス(Plutarchus, 46?-127?)の『プルターク英雄伝』(Parallel Lives, 2c?)における「怪物」物退治伝説の影響関係が実証されながら、「通過儀礼」の失敗が語られていることである。

第二章で論じられた「通過儀礼」の「回避」を、『海辺のカフカ』(新潮社、二〇〇二年九月)における「王位継承」の「回避」として論じたのが、第四章「暴力」の両義性——『海辺のカフカ』を中心に——である。ここでは、『羊をめぐる冒険』や、『ねじまき鳥クロニクル』(新潮社、一九九四年四月—一九九五年八月)、『海辺のカフカ』(新潮社、二〇〇二年九月)に共通するもの

として「父なるもの」としての「王」と「王権継承回避」(「一三頁」という「構造」が見いだされながらも、作品間の差異が示されている。ここで特に興味深いのは、第四節「デリダ」「プラトンのパルマケイアー」を通して読む『海辺のカフカ』である。周知のように、ジャック・デリダ(Jacques Derrida, 1930-2004)は「プラトンのパルマケイアー」(“La pharmacie de Platon,” 1968)において書き言葉としてのエクリチュール(écriture)論を展開したのであるが、本章では『海辺のカフカ』の主人公、田村カフカをエクリチュールになぞらえ、話し言葉としてのパロール(parole)的「真理」の「回避」すなわち「王位継承」の「回避」を行うものとして読まれており、興味深かった。

第五章「神話と歴史を紡ぐ者たち——『1084』をめぐる——」では、主に『1084』(新潮社、二〇〇九年五月—二〇一〇年四月)とそのプレテクスト(protexis)である『古事記』の関係が論じられている。著者の内田氏はもともと『平家物語』など古典を研究されていたこともあり、この章では古典の豊富な文献が生かされている。『古事記』という国民国家の神話をプレテクストとして選ぶことは、小説が国民国家の「構造」を強化してしまう恐ろしさがある。しかし、『1084』では神話に対抗して個人レヴェルの「愛」の「物語」を対置することで、国民国家の神話を相対化しているのだという。

このように、本書では徹底的な構造主義的還元をとおして、逆説的に「構造」からの「差異」が導き出されているのである。終章「村上春樹文学における神話と物語の構造」では、このよ

うな「反復」する「構造」からの「差異」が、「そうした神話的思考様式から人は如何にして離脱しうるのかを語るという、ある種の〈メタ神話〉」（二八二頁）として発見されている。すなわち、「構造」には還元不可能なものが逆説的に見いだされているのである。そして本書の最後において、「〈ストックホルムに呼ばれようと呼ばれまいと、ムラカミはここにいる。〉」（二八二頁）とあるように、最終的に見いだされたのが、「物語」の「構造」を「反復」させる「ムラカミ」という作家の固有名であったのも興味深い。

最後に、この研究書の目次を掲載しておく。

○目次

序章 「村上春樹作品とテクストの深層」

第一章 「直子」から、「直子」へ

——村上春樹初期作品における〈喪失〉の構造化——

第二章 「回避される「通過儀礼」

——『羊をめぐる冒険』論——

第三章 「他者」〈分身〉〈メデイウム〉

——村上春樹、80年代から90年代へ——

第四章 「暴力」の両義性

——『海辺のカフカ』を中心に——

第五章 「神話と歴史を紡ぐ者たち

——『1Q84』をめぐる——

第六章 「調和のとれた完璧な共同体」に潜む闇

——『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』論——

終章 「村上春樹文学における神話と物語の構造」

二〇一六年一〇月 台北・瑞蘭國際 一九三頁 四〇〇元

(韓国・朝鮮大学校外国語学部日本語科助教授)